

研究ニーズから出口まで

九州支所長 吉田 成章

来年、森林総合研究所創立百周年を迎えるということで、九州支所における創立以来の試験研究動向を振り返ってみた。各分野の研究課題をたどっていくとその時代の関心事、問題点が見え、ここ60年弱の九州の森林・林業の動向に見事にリンクしている。我田引水であるが、それぞれの時代の研究要請、研究ニーズに応じてきたという点ではその役割を果たしてきたのではないだろうか。



しかし、問題を先取りし、現場で問題が顕在化する前に回答を出せたかという点では、多くの課題で疑問を持たざるをえない。その中で、筆者も関与した課題に2つほど時代を先取りしたと感じられる課題があった。1つは「農林漁業における環境保全的技術に関する総合研究」（1973～77年）における昆虫群集研究であり、もう1つは「農林水産系生態秩序の解明と最適制御に関する総合研究」（1989～98年）である。前者は、昆虫学会の世界的な動きにも影響され、その当時では全く新しい生物多様性の概念を持ち込み、その解析手法にせまった。しかし、少し時代が早すぎ、その成果は生きた形で継承されなかった。生物多様性が本格的に森林研究の俎上にのぼるのは十数年後である。これに対して後者は、林業から森林研究への歴史の大転換点となり、20世紀に引導をわたす役割を見事に演じたとみた。これらの研究内容についての評価は後世に譲るとして、問題の先取りも早ければいいとは限らない難しさを感じた。

さて、振り返る作業の中で、具体的にどの研究の成果がどの技術や施策にどう反映されたかの記述が難しかった。最近最も口やかましくいわれているアウトカムの部分である。一連の研究の流れの中に、成果が生かされるまで見届ける仕事をどのように敷き込むかを考えさせられた。筆者はマツ材線虫病研究のなかで、支部学会での講演が現場の事業に大きく影響する事態、すなわちアウトプットが即アウトカムになる時代を経験した。しかし、学会発表が防除現場に無用な混乱をもたらすこともあった。学会報告が即実用化技術になるという分野もあるだろうが、やはり学会報告と実用化は別と見るべきではないだろうか。研究成果を社会に生かすためには個々の研究成果を実用化技術に高める作業が必要であり、大きな位置を占めると解析した。

研究ニーズを的確に把握し、流れに逆らわず時代を先導し、その研究成果を社会に還元するという研究システムが今後構築されていくことであろう。実動している姿を想像すると胸躍るものがある。